

点描

北海道50年の歩み—真宗同朋会運動— No. 6

1963
昭和38年

1947年と2006年の寺院数の推移。47年南3は3組の寺院数

組名	1947	2006
1組	28	29
2組	24	21
南3	45	24
北3		18
4組	42	60
5組	20	19
6組	16	18
7組	21	19
8組	25	20
9組	28	29
10組	15	11
合計	503	470

都市圏に開かれた
「札幌地域同朋の会」

1963年(昭和38)「北海真宗」十月号とともに発行された『教学通信』に、所属寺を越える形態の「札幌地域同朋の会」を開設すべく準備を進めていることが報告されている。

同朋の会の結成は、寺院だけではなく、地域や職域に形成されることが願われた施策でもある。

第一次五カ年計画最終年度にあたる1966年(昭和41)、訓彌信雄宗務総長は、宗議会の演説で「運動の中心は、教団の近代化と云う一点にあった」と述べつつ、「教団の近代化ということは、単なる個人の理性的自覚を強調し、その自覚をもった個人個人を再組織して、新しい教団の制度を確立

教化活動を有機的に展開する

というような奇麗事ではない」という。

では、それは何か。「個を超えて個を包むもの、それを如何に開くか。」

個を包むものとは、本願を共同に生きる共同体、すなわち僧伽である。これが現代人の課題であり深い願いである。同朋会はこの教団が真の僧伽に叶うか否かの問いに応えんとする実践運動に他ならないと断言する。

『北海真宗』に掲載された1947年(昭和22)の寺院数と、2006年(平成18)を比較すれば、いかに札幌圏の寺院数が増加したかが判る。

都市化が進む中で、各寺院・別院はそれぞれに教化活動を行われているが、年配の方が亡くなれば、所属寺はおろか宗派名もわからない。また、お内仏を護持していくことを拒絶するということも仄聞されるところである。

1963年の札幌地域同朋の会は、どのように展開したのかは記事として確認することはできなかつたが、現在、教部の青壮年

4/22
帯広別院



新しくなった御厨子等を拝観し、本山の壮大さに感銘を受けました。

18名

4/1
第5組 敬徳寺

3名

4/2
同 右

4/1
第12組 光明寺

3名

特伝や教区定例、公開講座などが都市部における教化事業として展開している。

訓彌総長が断言したように、僧伽の実現が人が求めて止まない心であるならば、人のつながりが断絶している今こそ、さらに広く深い真宗同朋会運動の展開が待たれている。